新しい主教材『いろどり』の実践

石川県日本語講師会（公益財団法人　石川県国際交流協会）
長田　明子

Ⅰ．研修で設定した課題

私が所属している石川県日本語講師会（以下講師会に略します）は、主に公益財団法人石川県国際交流協会（以下協会に略します）が主催の日本語授業を担当しています。授業は在住者向けと海外の学習者向けの2種類です。在住者向けは3種類で、1クラス4～6名のグループクラス、プライベートクラス、2～4名のセミプライベートクラスです。今回はグループクラスについて扱います。

グループクラスは令和6年1月現在、入門から日本語能力試験N2レベル以上が対象のコースが全7クラス、約30名が在籍中です。1年が2期で、各期が全40回、学習時間は全60時間です。授業は週2回で1回90分、1クラスを教師2～3名が担当のチームティーチングです。令和4年9月まで入門から初中級の主教材は『みんなの日本語』や『中級へ行こう』等、主に文型積み上げ型でしたが、近年は課題遂行（Can-do）による目標設定を取り入れたコミュニケーション重視型の『まるごと』を使用のクラスもありました。

令和4年10月から、入門から初級の2コースの主教材『みんなの日本語初級Ⅰ』と『同初級Ⅱ』は『いろどり』に順次移行し、移行完了の令和5年10月から『いろどり入門』と『同初級1』、『同初級2』の3コースになりました。このレベルは、教師は長く文型積み上げ型の主教材を使用していたため、まだコミュニケーション重視型の主教材に慣れていません。そして、授業の流れや道具等、準備や教室活動にもかなり変化があり、当初は戸惑いがありました。学習者も教師と同様に、教室活動が変化した影響は大きく、特に文型積み上げ型に慣れた学習者ほど慣れるまで時間がかかっていた様子が見られました。

私は今回の課題として、10月開始の令和5年度後期の『いろどり』使用のクラスを対象に、令和6年2月までの約4か月間、まず教師の立場から現場で起きている問題を探り出し、同じチームや他のクラスの教師からも情報を得ることにしました。この課題を通した気づきや発見を講師会や協会と共有し、令和6年度前期に反映させ、機会があれば、これらを石川県内の他の地域にも積極的に発信したいと思いました。

Ⅱ．課題の背景

石川県では、令和4年11月に文化庁から出された「地域における日本語教育の在り方について」のポイントに基づき、生活Can-doを取り入れたA1～B1まで350～520時間に対応したカリキュラムを作成、実施する予定があります。今はその具体的な取り組みの検討が始まるところで、私も講師会の会員や今年度の地域日本語教育コーディネーター、現場の教師等としての立場で『いろどり』の授業の課題や在住者の日本語に何が必要か等、現場の問題を振り返る活動に関わっています。近年、協会のグループクラスと同様に、県内の他の地域の在住者向けのクラスにおいても、積極的にコミュニケーション重視型の『まるごと』等を入門から初級の主教材とする流れがありました。そして、現在グループクラスで発生している問題も、ほぼ同様のことが起きていました。この振り返りは、石川県がこれから取り組む活動や検討に直接関わるため、私は石川県の在住者として、今回の活動で新しく得たことを発信したいと思いました。

Ⅲ．実践の内容

１．授業担当者としての参加

活動のために、令和5年度後期の『いろどり』使用の入門レベルを1クラス担当しています。

２．第１回アンケート

（1）実施

私は今年度の講師会の中の「地域における日本語教育の在り方についての検討会（以下在り方チームに略します)」にも参加しています。メンバーは私を含めて３名で、３名の内２名が今年度の地域日本語教育コーディネーターです。在り方チームは石川県が新たな在住者向けのカリキュラムを作る準備のために『いろどり』を実際に使用した感想や、在住者の日本語に何が必要か等を現場の授業担当者として考え、協会と連携を深めることを活動の主な目的としています。

在り方チームは９月 26 日の後期開講に合わせて、９月 21 日から 30 日までの期間、講師会の全会員 15 名を対象にグーグルフォームのアンケートを実施し、『いろどり』の使用経験の有無や意見、感想等を募りました。10 月７日の講師会の月次ミーティングで回答の集計や意見等のまとめを発表後、全体で現場の問題等について意見交換し、後期に向けて意識化を図りました。

(2) 在り方チームの検討ミーティング

10 月 18 日のミーティングの際に、アチーブメントテスト等の数値化可能な客観評価がまだないことや学習者自身が行う Can-do 評価の扱い等、この時点においての問題を発見しました。

(3) 在り方チームと協会の検討ミーティング

10 月 31 日の協会の専任教師２名（石川県の総括コーディネーターも兼任）とのミーティングの際に、アンケート結果や発見した問題等を共有し、それらについて議論をしました。

３．第２回アンケート

(1) 実施

後期の折り返しの時期のため、12 月 23 日から 31 日までの期間、在り方チームは講師会の全会員 15 名を対象にグーグルフォームのアンケートを実施し、令和５年度後期において『いろどり』使用の際に以前より工夫した点や困った点、評価方法、使い方に関しての提案等を募りました。

(2) 在り方チームの検討ミーティング

１月 12 日のミーティングの際に、アンケートの回答を確認したところ、授業の進め方や Can-do 評価の扱い方、ワークシートの使い方等について、この時点において担当者間で認識にずれがあるため、令和６年度前期の開講までに講師会全体で共通認識を図る必要があることが判明しました。

４．今後の予定について

２回のアンケートの結果と検討等をふまえて、２月に協会主催の『いろどり』の研修講座で活動を報告する予定でしたが、能登半島地震の影響を鑑み、１月末に中止となりました。講師会全体としては、令和６年度前期の開講までに、さらに改善を図る予定です。その他、地域日本語教育コーディネーターの活動として、１月から２月にかけて協会主催の『いろどり』の使い方講座（全３回）の講師を担当しました。

Ⅳ．実践を通して考えたこと

実践を始めた当初は、主教材を文型積み上げ型からコミュニケーション重視型へ移行したことによる教室活動の葛藤や混乱について焦点を当てるのだと思っていました。しかし、実践を進めるうちに、学習者が生活者として日本語を学ぶ過程や意味について、改めて深く考えるようになりました。

最も大切な目標は、学習者が自律して学習を進め、学んだ日本語を使って社会で自立することです。教師は学習者をうながすファシリテーターとしての役割が求められています。

その過程をふまえて、地域日本語コーディネーターは現場の担当者として、常に周囲の関係者（私の場合は講師会の会員や協会の職員等）と共通の目標の意識化と連携を図りながら協働し、対話や議論を重ねて周囲と共に丁寧に前進することが重要だと思いました。これからも、現状を乗り越えるために、なぜ社会に自分は存在するのかを振り返りながら、活動を進めていきたいと思います。